

教員養成課程をもつ大学における 音楽教育の一考察 (その3)

柏瀬 愛子・佐地 多美
藤田 まゆみ・中村 美保子

A Study on Music Education at Colleges with Teacher's Training Courses (Part III)

A. KASHIWASE, T. SAJI
M. FUJITA and M. NAKAMURA

はじめに

教育に人を得ることは、必要欠くべからざることである。教育との最初の出会いとなる幼稚園教諭、全教科を担当する小学校教諭（とくに低学年担当者）は、その指導しなければならない教科目の全容に熟達することが望まれる。なかでも、技能関係教科である音楽科については、知識の貧富や技術の上手、下手がはっきりわかるものであり、直接授業のあり方に関係し、その結果は子どもの音楽性の発達に影響を及ぼすものである。

そこで、本学では教壇に立った時だれもが困らない教師であるためにというモットーのもとに、音楽教科各分野の教科内容に関連性を持たせ、短期間でより多くの知識と技術を身につけられるように、その充実を計る検討と実践を行ってきたことは、すでに第1報、第2報で述べたとおりである。

本年、学部児童学科の最初の卒業生を教職の場に送り出し、小学校で行なわれている音楽の授業の実態がより詳しく手に入るようになったのを機会に、在学中に修めた実技が現場でどのように活かされているか、また指導上困っていること、深い技術を必要とすることなど要望を含めて追跡調査してみた。この結果を今後のカリキュラムに反映させ、後輩のより良い指導に役立てたいと思い、検討したので報告する。

I 卒業学年が受けていた教科内容（器楽＝ピアノ＝に関する事項を中心として）

調査報告をする前に、49年度卒業生および、48年度、49年度特別編入修了生が受けていた器楽に関する教科内容について、その過程を述べてみると次のようになる。

1 第1回卒業生（46年度入学 97人）

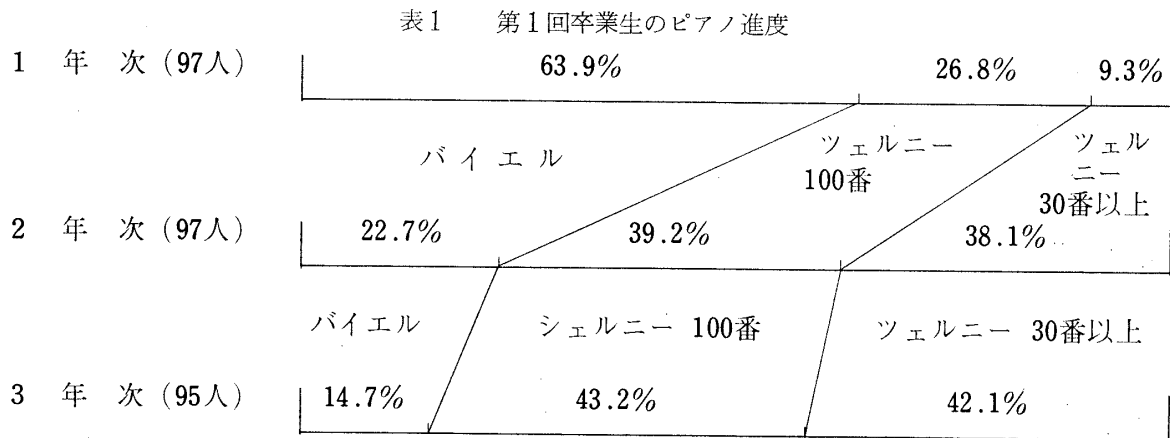
1年次 経験者は各担当者が、能力に応じ適当な段階から始めた。初心者は、全員バイエルから始めたが、最初に現在ほど厳しく、1年間でバイエル完了を打ち出さなかったために、1年間で終了した者は3分の2ぐらいだった。

2年次 前期試験の課題曲として、ブルグミュラー25の練習曲の中から任意の曲を出したので、全員が少なくとも1曲を弾いた。しかし、バイエルを終了していないために、その曲にかかりきってしまった者も幾人かいた。そして後期はまたエチュードを中心にレッスンを行

ない、数人を残してほぼバイエルを完了させた。2年次の最後に、エチュードの試験とともに弾き歌いの初見を試みた、それは、幼児歌曲の中から4曲の簡単な歌曲を段階的に選び、程度に合わせて弾かせた。こういうことが初めてということもあり、かなり戸惑った学生が多く、結果は芳しくなかった。

3年次 エチュードと並行してマーチを採り入れた。マーチは原調はもちろん、ハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調に移調し、そのうえ、速度を自由に、またリズムも付点などに変えても弾くことができるよう指導した。この移調も慣れるまではかなり手こずっていたが、練習をしていくうちに、だんだん要領よく弾くことができるようになった。そして前期の試験では、全員がなんとか弾きこなし。後期は器楽最後の試験ということもあり、課題を自由曲とし、各学生が自分の程度に合わせて選曲し練習した。それまでは与えられた曲ばかりをやってきたので、選曲するということを知らず、改めてそのむずかしさを理解したようだった。このことも学生にとってよい勉強になったと思う。これと並行して、小学校の共通教材の弾き歌いを行なったが、自由曲の練習に精一杯という者や、できても3年生までという者が多く見られた。

3年間のエチュードの進み具合をグラフにしてみると表1のようになる。3年次になってもバイエルをやっていた者もいるが、これは前にも述べたように、初年度に1年間という打ち出しをしなかったためである。



注 3年次で人数が減ったのは、児童学専攻の選択によるものである。

2 第1回特別編入修了生 (48年度入学 28人)

多少なりとも経験のある者はごくわずかで、そのほとんどが初心者であった。そこでその者たちはバイエルから始め、1年間で80番ぐらまで進むように指導したが、よく進んだ者で70番程度、なかには40番までしか進まなかった学生もいた。7月の採用試験に弾き歌いのある者はその前から、あとは夏休み明けから少しずつ小学校の共通教材を採り入れていったが、バイエルの40番程度を弾いている者にとっては、弾くか歌うかのどちらか一方で、なかなか弾き歌いまではいかなかった。そして、10月に教育実習に行き、いかに自分が弾けないかということを知り、それから弾き歌いに力を入れた。しかし、最後の試験で、バイエル、マーチ、弾き歌い(小学校の共通教材)の3つを行なったが、やはり弾き歌いの出来が一番悪かった。

3 第2回特別編入修了生 (49年度入学 16人)

前年度の学生から教育実習で弾き歌いができなくて困ったという意見が多く出たので、この

年の学生には、バイエルではなく、伴奏や弾き歌いを中心とした教材を用いた。内容は非常に簡単なものであったが、やはりほとんど初心者ということもあり、1年間で1冊を終了した者は3分の1程度にとどまった。この年の学生は前期に理論の講義を受けたので、伴奏付けも前年度よりはスムーズにできると期待したが、それほどの効果は見られなかった。つまり、頭では理解していても、技術の遅れもあり、すぐには和音がつかめないという状態であった。そのために夏休み前から少しずつ小学校の共通教材を組み入れたのだが、1曲を弾くのに、簡単な1年生のものでも2～3週間かかった。

Ⅱ アンケート調査

次に大学で修めた理論や実技が、現場でどの程度役に立つか、あるいはどんな点が十分身についていないのか。現在、一番困っていることは何かなど、現場の実態や要求を調査した。

1 調査方法

対象は第1回卒業生、第1回および第2回特別編入修了生のうち小学校に勤務している110名とし、実態調査のアンケート用紙を50年7月上旬に郵送し、50年9月上旬回収した。回収率は38.1%である。回収率が低いので正確な結果が得られたかどうかは非常に疑問であるが、資料として報告させていただく。

2 調査および結果

- a) 受持ちは3年が30%、2年が20%、4年が19%、1年は16%で、低・中学年に集中している。
- b) 担当教科についてはほとんどが全教科を担当しているが、音楽のみ担当が1名、音楽と図工のみ担当が1名いる。
- c) 交換授業は原則として行なわないが、低・中学年を担当している者が、受持ち時間数の平均化のため、高学年の家庭や音楽を手伝っている例が2・3見られる。
- d) 専科教員がいる学校は52%で、その内訳は音楽の35%をトップに家庭20%、理科14%、図工と体育が12%となっている。
- e) 校内に研究グループを持つ小学校は45%で、2つ以上のグループに所属している者もあるが、理科に24%、算数、図工、音楽がそれぞれ14%ずつの割合で所属している。
- f) 音楽関係のクラブを持つ小学校は83%で、その中で指導にあっている者は37%であり、そのクラブ名は鼓笛隊、合唱、合奏などである。
- g) 教育委員会が作成したカリキュラムを使用するのは全体の62%で、学校独自のカリキュラムを使用しているのは12%である。また、10%が両者を併用している。
- h) 指導内容の中心は歌唱が最も多く35%、続いて基礎33%、器楽22%の順になっている。
- i) 授業中によく使う楽器では、オルガンだけと答えた者が30%いる。また、17%がピアノやオルガンとエレクトーンを併用している。
- j) 現在、授業をするにあたって困難な点はあるかという質問には、95%が「ある」と答えた。一番困っていることは、子どもの能力や反応に応じた指導法や教材展開法で、44%を占めている。大学における講義や実習、また、短期間の教育実習ではより適切な指導法を体得するのは困難であるし、現場の経験を多く持たない者にとっては当然といえるであろう。ピアノ（オルガン）が弾けない者10%、ハーモニカ、笛、木琴などの指導、および合奏の指導に苦慮している者が11%いる。これは、十分に楽器を使いこなせる能力がないた

めに起きる問題であると考えられる。歌がうまく歌えない、合唱が指導できないと答えた13%も前述と同様、自信を持って歌え、ハーモニーできる教師自身の能力の有無にかかってくる。また、子どもが創作したものを書き取ったり、聞き取ったりするなどのソルフェージュの力がないと答えた者が9%ある。この学年はソルフェージュの実習が行なわれていなかったが、以後その必要性を認め、49年度より「声楽」でソルフェージュの実習を行なっている。

- k) 学生時代にどんな勉強をもっとしておけばよかったと思いますかという質問には、いろいろな楽器類の扱い方、合奏および鼓笛隊の指導と答えた者が24%いるが、限られた「教材研究」の時間内でどれだけのことができるかは疑問であるが、今後、検討の余地があると思われる。さらに、もっと勉強しておけばよかった点、伴奏づけの16%、ピアノの14%、弾き歌いの12%、理論の7%はお互いに影響し合うもので、理論で裏づけられた伴奏づけであり、ピアノ奏法や唱法に裏づけられた弾き歌いであるため、「理論」「器楽」「声楽」のそれぞれの教科内容を十分に理解習得させた上で、さらに有機的な関連を持たせるようにしたい。

Ⅲ 考 察

アンケート結果から、学生時代にもっと勉強しておけばよかったこと、現在授業で困っていることは、合唱、合奏、ソルフェージュ、指導法、それに広い意味でのピアノであるということがわかった。そこで今回はピアノだけを取り上げ、授業科目の「器楽」と結びつけて考察してみることにした。

広い意味でのピアノとは、基礎的ピアノ奏法はもちろんのこと、伴奏づけ、弾き歌い、初見などであり、「器楽」の授業内容は基礎的ピアノ奏法に片寄らず、「理論」「声楽」との結びつきを考え合わせた実習（伴奏づけ、弾き歌い、初見）をすることが必要である。これは第2報で報告した通り、徐々に改善案を実施している。しかし、第1回卒業生、第1回、第2回特別編入修了生には十分に徹底していなかったため、前述のようなアンケート結果が出たと思われる。

そこで今後は、さらに充実した授業内容を全学年に徹底させるため、既報の改善案を一部修正することにした。その理由は、特に3年次にツェルニー100番から30番を練習曲とし、さらに課題レッスン（伴奏づけ、弾き歌い、初見）を行なうことは、短時間（1人10分程度）のレッスンでは消化しきれない内容であること。さらに、幼稚園、小学校における指導に必要な基礎的ピアノ奏法は、ツェルニー100番の50番程度で一応よいのではないかという点である。（もちろんツェルニー30番を弾きこなせる実力を持てば言うことはないが）

次に、一部修正した改善案を示してみる。

ここで一番問題になるのは、いくら授業内容を充実させても、初心者に対して徹底した指導をするには10分のレッスン時間は十分とは言えない。そこで、基礎的奏法を習得するバイエルとツェルニー100番は、年に4、5回の認定試験を行ない、合格した者のレッスンは課題レッスンのみを行なう。これによって、今まで合格者の基礎的奏法に当てていた時間を、初心者への指導を徹底させる時間として活用させてはどうだろうか。つまり、入学時すでにツェルニー30番、40番を弾いている者は、1年次の前期中にはバイエルとツェルニー100番の認定試験をパスできると思われるので、1年次における初心者への基礎的奏法の指導が、従来よりもいくぶん

表Ⅱ 「器楽」授業内容改善案

| 学 年 | | 基 礎 的 奏 法 | 課 題 レ ッ ス ン |
|-----|-----|------------------|---------------------------------------|
| 1 年 | | バイエル (スケール・カデンツ) | |
| 2 年 | 前 期 | ツェルニー 100番 | マーチ (移調奏) |
| | 後 期 | ツェルニー 100番 | 幼児歌曲の弾き歌い (伴奏づけを含む) |
| 3 年 | 前 期 | ツェルニー 100番の50番程度 | 1. 小学校共通教材の弾き歌い (伴奏づけを含む) 2. 単旋律初見 |
| | 後 期 | | 1. 自 由 曲 2. 複旋律初見 |

余裕を持って指導できることになる。2年次、3年次では、基礎的奏法を認定された者は課題レッスンのみを受け、そうでない者は両者を受ける。つまり課題レッスンだけのグループと、基礎的奏法と課題レッスンのグループに分かれることになるが、基礎的奏法の認定を受ける者が順次増えるので、2年修了時は50%程度、3年前期修了時にはほぼ全員が課題レッスンだけを受ければよいことになろう。時間数、教官数、設備などに制約された現在の状態では、基礎的奏法の認定試験とグレードに合ったレッスン方法を併用することが、初心者の実力を早期に養成し、また、上級者の一層の熟達を計るものと考えられる。以上のような改善案を元に、具体的な実施法をさらに検討し、段階的に各学年に実施していきたい。

要 約

教員を養成することを目的としている本学では、音楽に関する教科が5科目〔理論、声楽、器楽（一部選択）、教材研究（児童教育専攻必修）、音楽リズム（幼稚園免許取得者必修）〕があり、これらを週6時間平均で履修する時間割が1年次より3年次までに配置されている。この時間数は、すべての音楽的内容に熟達するには決して十分だとはいえない。しかし、目的を同じくする他大学の時間数を比べると、はるかに上回っている、これは音楽性豊かな教師となってもらったための本学の配慮からであるが、ただ単に時間数が多いだけでは、豊かな音楽性は育たない。そこで、時間を有効に使い、より多くの音楽的知識を学び、技能にみがきをかけるためには、「どのような教科内容を、どのような方法で指導するのがよいか」を、この2年間にわたってさまざまな角度から検討し実践を試みてきた。

教員養成系の学校で音楽というと、技能面である声楽や器楽（本学の場合はピアノ）が中心となりがちで、その教科内容も声楽では、コールユーブンゲンからコンコーネへ、器楽では、バイエル、ツェルニー、ソナチネという順序を経ていく方法がとられがちであるが、こうした基礎練習過程を経る方法は、いずれも専門的に習う人を対象とするものである。

教師として教壇に立ち音楽の授業をしてゆくためには、もちろんすぐれた演奏能力も必要であるが、それ以上に大切なのは幅広い指導力、応用力、そして音楽的素養を身につけることではないだろうか。そこで、われわれは第1回卒業生を教職の場に送り出したのを契機に、小学校で音楽の授業をしてゆくに当たり、「どのようなことが一番困るか」「本学在学中に学んだ内容が、自分の行なう授業の中で、どのように活用されているか」などアンケート調査をしてみた。

その結果、在学時代、演奏技術のすぐれていた人でも、歌いながら弾くことのむずかしさや、指導法のむずかしさを訴え、こうした内容の強化や簡易伴奏づけ、すなわち和音分析できる力をつけることを要望してきた。これを見ても常にわれわれが感じている、弾く力と指導することの不一致が強調される。

アンケートの回収率がすこぶる悪かったので、これが卒業生全員の一致した意見だとはいえないが、職場で困ると思われること、学生時代に身につけておくべき必要事項をまとめてみると、

- 1 弾き歌い
- 2 簡易伴奏法（理論だけでなく、実践を通して和音分析の理解をもつ）
- 3 初見奏
- 4 簡単な曲の移調奏、移調唱
- 5 合唱指導
- 6 簡易楽器における合奏指導
- 7 リズム、聴音など感覚力の養成

があげられる。

こうした内容履修は、一応器楽が中心となると思われるが、他教科との密接な相互関係も大切であろう。

今までわれわれが望んでいた高度なテクニック学習は、実際の場に臨んであまり役に立たないようである。そこで指導力、応用力を身につけることを重視したカリキュラムとして、次のような案を立ててみた。

1年次 基礎技術（認定試験法を作り、その段階に到達した者は、基礎練習を免除し、できない者に時間を回しその向上を計る）

2年次 基礎技術（1年次につづく）

応用技術（いろいろな課題練習を行なうことにより、技術の向上を計る）

3年次 応用技術（弾き歌い、初見、伴奏づけなど、直接指導に関係のあることを中心とする）

自由曲（自分の演奏技量を試す機会を与えるため）

このカリキュラムに基づいた指導を、来年度入学の新1年生から実施してみたい。また、23年生においても可能な限り移行措置をとって教育効果をあげたいと思っている。そして、この方法において教育を受けた学生が、教職についたとき再度調査を試み、結果の検討を重ねたい。

なお、今回はアンケートを行なう時期に問題があったことを反省している。回収率をみると、特別編入1回生（48年度修了者）で職場経験が1年以上できた人たちが一番多く答えを返してくれている。ということは仕事に慣れ、問題意識をはっきりつかむことができ、それを表面化するゆとりが持てるようになっているのではないだろうか。

今後こうした試みをするときには、対象者を選ぶことが大切だと考える。